

## 「汚れた霊を追い出す」

2014年07月09日

マルコによる福音書1章21節～28節。「一行はカファルナウムに着いた。イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。『ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。』イエスが『「黙れ。この人から出て行け』とお叱りになると、汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。人々は皆驚いて、論じ合った。『これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。』イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。」

主イエスは、ガリラヤ湖の北にあるカファルナウムの会堂で教え始めた。その教えは、律法学者たちの無味乾燥な律法解釈ではなく、ご自分の主体をかけて、神の恵みのリアリティを示し、人の心に生きる喜びを満たす教えであった。人々は驚き、聞き入った。

その会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて、主イエスを見て「正体は分かっている。神の聖者だ」と叫んだ。主イエスが誰であるのか分からない時、彼だけが正体を「神の聖者だ」と見抜いている。汚れた霊が主イエスの「聖」を認識した。この逆説が信仰の真実である。私は正しい、一角の人間だと思っている人は、主イエスに神を見て、ひれ伏すことはできない。罪に苦悩し、呻吟している人が確かな信仰を得ていく。

主イエスが「出て行け」と命じると、霊はけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。人々は「この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」と言い、驚愕した。そして、主イエスの評判はガリラヤ中に広まった。

福音書には、汚れた霊（悪霊）がしばしば登場し、悪霊追放が福音宣教の大きな柱になっている。当時、悪霊がうようよと徘徊し、人に取りつく。すると、その人は「狂気」に陥れられると受け止められていた。悪霊が出て行くと「正気」に戻る。主イエスは「狂気」から「正気」への回復を福音として宣教した。どの社会でも、何かに取りつかれ「我を失う」という話はある。古代社会においては、なおさらである。

悪霊追放は、いつの時代でも見られる福音の内実を示している。悪霊に取りつかれるとは、地上のものを、あたかも絶対的な神であるかのように受け止めることである。地上のものは、それなりの、相対的な意味と力を有している。それら相対的なものを心と体の全てを支配する絶対的なものとして受け止める時、事柄が見えなくなり、我を失う。

人は皆、存在の不安定さに怯え、不安と恐怖に駆られている。何かを支えや頼りにして生きていきたい。お金に、権力に、芸術に、異性に、病気などに心と体を取り込まれてしまうことがある。主イエスは地上のものに縛られている状態からこの人を解放された。地上のものは全て、それなりの意味と力しかなく、神だけが絶対であることを示されたのである。ヨハネ福音書8章32節に「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」と書いている。「神は私を愛している」という真理が、地上のものを相対化する自由を与えてくれる。諸々のものに取り込まれて狂気に走っているような現在、悪霊から解き放たれることが人間を回復する福音である。